

否定辞「無」を冠する漢語の音と意味

——「無礼」の音の変遷をめぐる——

来 田 隆

目 次

序

一、「無礼」の音の変遷

二、「無礼」の周辺語

三、室町時代の字書に見られる「無」を冠する漢語の音と意味

結

序

漢語「無礼」は、今日の慣用ではブレイと読まれるが、「雅言集覧」に収載されているように、「源氏物語」にはムライの音で用いられている。呉音読みから漢音読みへと字音の系統を交替した漢語の一つである。本稿はこの「無礼」の音の変遷を跡付け、字音の交替の要因について、「無礼」の語彙的意味という観点から考察するものである。

一、「無礼」の音の変遷

平安時代には「無礼」はムライの音で用いられている。管見に入ったものは「宇津保物語」に二例、「源氏物語」に四例である。

否定辞「無」を冠する漢語の音と意味

○源侍従「はなはだかしかし(かしこし力)、ひとよのむらいはありもやしけむ。さらにおぼえ侍らぬは、なかずみがゑひこそすゝみて待けめ」などのたまひて『宇津保物語本文と索引』本文篇 298/1)

○かせはいとよくふけとも日のとかにくもりなき空のにしなるほとせみのこゑなともいとくるしけにきこゆればみつのうへむとくなるけふのあつかはしさかなむらいのつけはゆるされなむやとてよりふし給へり

〔源氏物語大成〕常夏 829/8)

○おとゝ朝臣や御やすみ所もとめよおきないたうゑひすゝみてむらいなれはまかりいりぬといひすてゝいり給ひぬ

(同右 藤裏葉 1003/11)

〔源氏物語〕の四例は、すべて異本による表記上の相違は無い。

院政時代から鎌倉初期の文献にもムライを見出すことができる。「大鏡」(千葉本)に一例、「古本説話集」に二例、「とりかへばや物語」に一例、「宇治拾遺集」に一例である。

○ふしなから御たいめんありて(中略)大小のことをも申あはせむとおもふたまふれは無礼ムライをもえはゝからすかくらうかはしきかたにあない申つるなりなとこまやかにのたまへと(『天理図書館善本叢書大鏡諸本集』所収 132ウ)

○かやうにしつゝ三たひかへしたてまつるにみたひなからかへしたひてはてのたひはこのたひかへしたてまつらばむらいなるへきよしをいましめられければ(『重要文化財梅沢本古本説話集』(勉誠社複製本) 101オ)

○大殿をりゐてのりなからありつるをむらいなりとおほしてこのうしはにけぬるなめりとくひかなしみ給ことかきりなりし

(同右 142ウ)

〔古本説話集〕の右の箇所は、「今昔物語」では次の如き表記である。⁽¹⁾

返ッ奉ラハ无礼ベシ(ムライベシ) (卷十六 第三十)

乍乗ラ入ッ无礼也ト思テ (卷十二 第二十四)

○おほかたには忍びて例の中納言のかたなるにしのたいにしのひやかに入り給へれいとあつき日にてうちとけときちらして居たりける見つけていとふひんにむらゐるにて待るにとてにけ入に

〔とりかへばや物語〕宮内庁書陵部蔵本近世初写（新興社複製本）第二分冊14ペ）

○かやうにしつゝ三たび返し奉るに、猶またかへしたびて、はてのたびは、このたびかへし奉らんは、むらいなるべきよしをいましめられければ〔宇治拾遺集〕大系本318/6

〔宇治拾遺集〕には、右のムライの他に次例の如くブレイが一例見られる。

○さきに行人、車をゝさへ候共、しりをむけ参らせて通しまいらするは、れいせつには候はるで、ぶれいをいたすに候とこそ見えつれば（同右 236/15）

〔宇治拾遺集〕のムライの用いられている説話は、〔今昔物語〕〔古本説話集〕にも所載のものであるが、右のブレイの用例のある説話は、〔宇治拾遺集〕以前には知られていないものである。⁽²⁾

鎌倉中期以降にはムライの用例は見出し難く、かわってブレイが現われるのである。尊経閣文庫蔵「極楽寺殿御家訓」は、筆者が必しも確かでないが、北条重時の作とすれば十三世紀半ばの成立と考えられる。⁽³⁾これにブレイが二例見出される。

○一 しゆつけをひばうする事あるべからず（中略）しんるい又は子などなりともぶれいなるべからず。（3オ）

○我がれうを扶持すべしと親も見給ひ、家をゆづり給ふうへは、一もんしんるひをはごくむべし。さやうにあればとて、ふれにすべからず。然ば又惣領をうやまひ、一大事の用に立つ事まめやかなるべし（19オ）

〔平家物語〕〔曾我物語〕にもブレイが見られる。

○其時事にあふたる侍どもめしよせ「自今以後も、汝等能く心うべし。あやまで殿下へ無礼の由を申さばやとこそおもへ」とて帰られけり。（〔平家物語〕大系本118/11）

右の「無礼」に高良本では「ふれい」の振仮名が付されている（大系本「凡例」）。

○御盃の前後は、遅参の無礼御免あれ〔曾我物語〕大系本287/7)

右も、大系本の底本(東大附属図書館青州文庫蔵十行古活字本)では「ふれい」と仮名書きである(大系本「凡例」)。「平家物語」の前掲の箇所は、「平草版平家物語」にも、

ayamatte Quambacudonoye bureino yoxi no mōsōzuruto coso vomoyeto (16^ウ)

とある。

本稿では中世末までを調査範囲としたのであるが、なお近世初期のブレイの例を一例付け加えておこう。

○飛弾定而諸侍に無礼をもいたすかと思へば〔甲陽軍鑑〕(勉誠社複製本)巻六9オ) 字書類について「無礼」の音を見るに、「色葉字類抄」では、

無礼人稱分 畏詞 (黒川本 中45ウ)

とあるが、室町時代のものである、

(無)礼フ (節用集、文明本・饅頭屋本・弘治二年本・永禄二年本・堯空本・易林本「無礼」)
(無)礼ハ (落葉集)

Burei, ブレイ (無礼) Vyamai naxi (礼無し) 礼儀に欠けること。(邦訳日葡辞書)

の如く、ブレイとなっている。

「無礼」の読みの確かな例を広く見いだすことは容易ではなく、得られた例も多くなはない。また、平安朝女流文学作品、説話文学、家訓、軍記物、字書類に見られる漢語を同一次元のものとして扱うことはではないが、「無礼」の音に関して、鎌倉初期まではムライで、鎌倉中期以降になるとブレイと音が交替したと見得るであろう。右の諸例から意味の上でムライとブレイとに差異を認めることは困難である。

二、「無礼」の周辺語

ムライからブレイへの音の交替は、いうまでもなく、呉音読から漢音読への交替であるが、「無」を上接語とする漢語で、これと同じ経過を辿った語は他に無いであろうか。今、「色葉字類抄」所載語について見るに、「ム」の部、「フ」の部にそれぞれ、次の如き語が挙がっている。

〔ム〕の部（既述の「無礼」を除く）

無心同（人情分）ムシン 無極謙那分ムコク 無実割差分右傍に「私日実字」ムシチ不濁致」とある 無道聞乱分ムコ 無故虞書分ムコ 無懺恥辱分ムセン 無益難部ムヤク 無氣ムテ

ナリ 無下同（ムケナリ） 無上道 無記性 無所記 无法ムハウ 無代ムタイ（「無」の右傍に） 无常ムシヤウ 无上

无偏ムヘン 无漏ムロ（黒川本 中45ウ）

〔フ〕の部

無為帝徳名フキ 無年陰陽一分フシ 無力疾病部医方分フキ 無愛同（人情分）フイ 無ヲムコトシ 類又タヨリナシ 無音フイン（黒川本中106ウ以下）

以上の二十語を、後世の室町時代の字書類（次節参照）での読みと比較すると、その詳細は省くが、両者に共通する語で、読みに相違の見られるのは、「無礼」の他に「無道」が指摘できる。「色葉字類抄」にムダウとあるが、室町時代の字書類では例外なくブタウと読まれているのである（次節参照）。「無道」は鎌倉中期の古文書にムダウと読まれた例があり、鎌倉時代はムダウであったことが指摘されている。呉音読から漢音読へという点でも「無礼」と歩みを等しくする語である。

呉音読語と漢音読語の勢力を通時的に見た場合、平安時代の「源氏物語」「枕草子」「更級日記」等の和文系文学作品の中の漢語は、呉音読語が主流であり、それに漢音読語を交えるというありさまで、作品を越えて、呉音読される語、漢音読される語が固定的であるとされている。⁵⁾ 中世の「保元物語」になると、平安時代和文系文学作品に比して、漢音読語の増加（呉

否定辞「無」を冠する漢語の音と意味

音読語の漢音読語への交替を含めて、が見られるようである。⁶⁾又、院政鎌倉初期の和化漢文訓読に於ては、平安時代の和文系文学作品とは様相を異にし、漢音読語が呉音読語を上回っているが、これらにも、時代の降るものほど漢音読語の増加が見られる。⁷⁾

漢語の音は、個々の語がその出自・伝統に制約を受けているものではあっても、通時的には漢音読語増加という傾向が指摘されているのであって、「無礼」や「無道」も、その大勢に従う事例と解せよう。しかし、「無」を上接語とする漢語で、中世に呉音読から漢音読へと交替したのは、「色葉字類抄」所載語の中では、これら二語に限られるのである。しかも、注目すべきは、「無礼」と「無道」の二語は、礼節、道理という、いずれも社会秩序にとって極めて重要な行動原理に関するマイナスの評価を与える語であるということである。これは単なる偶然に属することではなく、これら二語の字音の交替の要因として、その語彙的意味が深く関わっていることを示唆するものである。そこで、室町時代の字書類所載の「無」を上接語とする漢語について見るに、その音と意味との間に、次節で述べるような対応関係を認めることができるのである。

三、室町時代に於ける「無」を冠する漢語の音と意味

資料として字書を取り上げたのは、読みの確定と多数の語を得ることができるからである。中でも「日葡辞書」は漢字表記は示さないけれども、個々の語についてその意味を知ることができるので、本稿では「日葡辞書」所載語を対象とした。「日葡辞書」から「無」を冠する漢語を抽出する手順は次の通りである。

(1) 「日葡辞書」の見出し語から探る。名詞形以外に「ニ」「ナ」を伴う派生形を掲出(併載)する語は名詞形を代表させる。意味記述の文中に現われる語、あるいは複合語は参考に取り上げる。

(2) ローマ字綴りの漢字表記への翻字は、土井忠生・森田武・長南実編「邦訳日葡辞書」に従い、また、次の字書類を参照した。「落葉集」(「落」と略称。以下同じ)、節用集、文明本(「文」)・伊京集(「伊」)・明応五年本(「明」)・饅頭屋本(「饅」)。

黒本本(黒)・天正十八年本(天)・弘治二年本(弘)・永祿二年本(永)・堯空本(堯)・両足院本(両)・易林本(易)、「元和本下学集」「下」、「温故知新書」「温」、「運歩色葉集」「運」である。

室町時代には吳音と漢音との混読語が少なからず存するので、吳音読語と漢音読語という分け方はせず、接辞「無」の音に着目し、「無」類と「無」類とに分ける。更に、形態上、「無」を除いた部分が(イ)一字の漢字から成る語と、(ロ)二字以上の漢字から成る語との二類に分ける。「無生無死」の如き構造の語は、(イ)に納める。

次下に具体例を掲げる。S・Bip は「日葡辞書」に存する「文章語」「仏法語」の注記である。他の字書類にも所載の語には、その書名(略称)のみを示すが、それらに義注が付されている場合にはそれを掲げる。紙幅の関係で、「日葡辞書」の意味記述(「」で示す)は「邦訳日葡辞書」のままではないところがある。

〔無〕類

(イ)Muacu (無惡) S 《罪科がなること》

Mui (無位) 《官位がなること》

Muyen (無縁) 落・文・運 《頼るべきものないこと、または、孤兒の境遇》

Muyenjo (無縁所)

Mugana (無我な) 落 《感慨や氣力に乏しいこと》

Mugai (無涯) 《限りのないこと、あまらば、量り知れないこと》

Mugaitei (無涯底) S

Mugacu (無訛) 落 《勉強をしていないこと、または、學問を知らないうこと》

Mugan (無眼) 《盲人》

Mugansu (無眼下) 落

否定辞「無」を冠する漢語の音と意味

Muguriō (無形) 落・文 《形がないこと》

Mugū (無窮) 落・文・鰻・弘・永・堯・両・易・運「無窮」 《限りも果てもないこと》

Mugūjizai (無窮自在) 連

Muguan (無官) 落・文 《官位がないこと》

Mugue (無碍) S 落・文「(無礙礙問)」 《障害がないこと》

Mugue (無価) S 落・文 《評価することができないこと》

Mugena (無下な) 文・永・堯・両・易・運 《あわれなこと、あるいは不憫なこと》

Mugen (無間) S 落・文「(無間獄)・伊・鰻・天・弘・黒・永・堯・運 (*には「文」と類似の義注あり) 《地獄》

Mugengigocu (無間地獄)

Mucō, I. bucō (無功) S → Bucō

Mugocu (無極) 文・永・堯・両・運 《際限のないこと》

Mucon (無根) 《根がないこと》

Mugon (無言) 文・永・堯 《沈黙》

Musai (無才) 易 《思慮分別もなく、能力もないこと》

Musai (無際) 落 《際限がないこと》

Muzai (無罪) S 落 《罪科がないこと》

Musō (無相) 文 《形体を具えないもの、すなわち、精神的なもの》

Muzan (無慚) 文・文「放逸(ハッテイ)無慚」・鰻・天・弘・永・堯・両・易・温 《同情、あるいは、憐憫》

Muzō (無慚) X (ハッテイ)語 → Muzan

Muxi (無始) 落・文 《始めがないこと》

Muxi * mujü (無始無終) * mujü の誤り 文

Muxiqi (無色) 落・(弘「三界ガイ欲界色界セキ無色界ムシキ」) 《色がないこと》

Mujiqi (無食) 落 《食事しないこと》

Muxit (無美) 文・堯・易・温 《虚言か、または、偽りの証拠》

Mujit (無美) 落・饒・永・易

Muxö (無姓) 落 《正体も気力もないこと》

Muxö (無障) Bup 落 《障害がないこと》

Mujö (無上) 落・文・天・堯・両・温 《最上のももの》

Mujöson (無上尊)

Mujö (無常) 落・文「無ム常ムヤウ」・天「無常ムヤウ」・饒・永・堯・両・易・運

Mujöno xecqi (無常の殺鬼) S

Muxö muxi (無生無死) Bup 《生まれも死にもしないこと》

Muxu (無主) Bup 落・饒・運 《主人がないこと》

Muxu (無数) S 落・永・堯・両 《数えきれないこと》

Muxucö (無数劫)

Mujü (無終) 落 《無限のこと、あるいは、果てのないこと》

Muxin (無心) 落・文・饒・堯・両・易・運・温 《心なし》

Mujn (無尽) 落・文・饒・易・運・温 《尽きてなくなり得ないこと》

否定辞「無」を冠する漢語の音と意味

Musocu (無足) 落・文・鰻・弘・永・堯・両 《無益なこと、徒勞なこと》

Muscounin (無足人)

Mudai, melius, Mutai 落「無^む体^{たい}」以下には「ムタイ」文・鰻・天・弘・黒・永・堯・両・易・運 《無法なこと》

Muri mutai (無理無体)

Murió (無刀) 落・文・鰻・易 《剣がないこと》

Muchin (無智) 文「^{ムクフ}募^{ムクフ}」聞^聞義^義也^也「鰻・易・運・下」文^文盲^盲無^無智^智之^之義^義「(無知)

Mugi, I, mugina (無地(な)) 《地なし。愛嬌はないが、人にいやな感じを与えもしない》

Mugin (無塵) 落 《綺麗で汚れないこと》

Muten (無忒) 落 《点なし》

Mutocu (無徳) 《利益がないこと、あるいは、利益を得ることがないこと》

Muni (無二《式》) 落・弘・永・堯・両 《二つとないこと、無比》

Muni musan (無二無三)

Munen (無念) 落・文「^{ムン}念^念」^念孝^孝縁^縁注^注云^云「^無念^念也^也」・伊・鰻・天・弘・黒・永・堯・両・易・運・温 (*には「文」と類似の義注あり)

《恨み、または、くやしむ》

Munó (無能) 文・鰻・運 《技芸や技量がない》

Munóxa (無能者)

Mubai (無媒) S 《媒介者、仲介者がいないこと》

Mufó (無法) 文・鰻・弘・永・堯・両・易・運・温 《法に違背すること》

Mufójin (無法人)

Mufan (無飯) 《食事なしなこと》

Mufu (無比) S 落・文 《匹敵するものがないこと》

Muft (無筆) 《字を書くすべを知らない》

Mubio (無病) 文 《良好な健康状態》

Mubiōka (無病者)

Mufen (無辺) 落・文・永・堯・両・易・温 《際限がないこと》

Muriō mufen (無量無辺)

Mumi (無味) 落 《味がないこと。面白味のない、つまらない》

Mumio (無名) S 落・文・饅・弘・永・堯・両 《名前がないこと、または、名前を持たぬこと》

Mumio (無明) S 落・文・饅・易・運 《光明がないこと、または、暗いこと》

Mumei (無銘) 文 《銘がついていないこと》

Mumon (無文) S 《字間がないこと》

Mumon (無文) 文「(素) 無紋、而白地、側見、有紋也」・運 《(文なし)

Muyacu (無益) 落・文・天・饅・弘・永・堯・両・易・運 《不必要なこと、または、利益がないこと》

Muyo (無余) S 落・文 《剰余がないこと》

Muyo muget (無余無欠) S

Muyō (無用) 落・文・饅・堯・両・易・運 《必要もなく、効用もないこと》

Muyocu (無欲) 運 《欲心をもたないこと》

Murai muco (無来無去) Bup 落「(無)来」 《来ること、帰ることもない》

否定辞「無」を冠する漢語の音と意味

Muri (無理) 落・文・黒・天・饅・弘・永・堯・両・易・運 《道理のないこと》

Muriō (無量) 文・永・堯・両・易・運 《計ることのできないこと、すなわち、無限》

Muriō quōdai (無量廣大)

Mureōzai (無量罪)

Muriō jinjin (無量深甚)

Murui (無類) 落・文 《匹敵するものがないこと》

㊦) Muecu fuzō (無惡不造) S 《おりとあらゆる罪科を犯すこと》

Muchi mot (無一物) S 落 《ただ一つの物もないこと》

Mucuxecai (無苦世界) 《苦痛も責苦もない世界》

Mucudocu (無功德) 落 《御利益がないこと、または、効能がないこと》

Mugonjet (無言舌) 《無言》

Muconbon (無根本) Bup 《根源のないこと》

Muxōvō (無音音) Bup 《音のひびきが聞こえないこと》

Muxabet (無差別) 《相違がないこと》

Muxosa (無所作) 《無為安閑としてゐること》

Mudōxin (無道心) 文・温 《修仰や敬虔さの少ない心》

Mugiūxo (無住所) S 落・文 《住場む所を持っていないこと》

Muninjō (無人声) Bup 《寂寞、あるいは、静寂》

Mufunjiō (無分曉) 文・伊・饅・天・弘・永・堯・両・運 「無分曉」 《見当外れの粗暴な返答》

Mufunbet (無分別) 落・文 《判断力に欠けていて、思慮分別がないこと》

Mumojina (無文字な) 《文字を知らない者》

Mubutxecaina mono (無仏世界な者) 《義理も礼儀もなく、その上、救霊のことなど念頭におかぬ人》

〔無〕類

(イ) Bai (無為) 落・文・黒・易 《平和、静穩、また、温和》

Bai buji (無為無事)

Buin (無音) 落 《礼儀を欠き、訪問しないこと》

Buyen (無塩) 文「無塩イライシク生肉ニク也」・伊 《魚などで塩の付けていない新鮮なもの》

Bugeó (無興) 落・文・饅・易・運・温 《寂しき、あじけなき、または不機嫌》

Bugeóqano (無興顔)

Bucó (無功) 落・文・易・運 《経験の乏しいこと、または、修練の乏しいこと》

Bucoina (無骨な) 落・文・伊・天・饅・易・下・運・温 《粗野で、礼儀作法を心得ていない》

Busai (無菜) 文「ツ匱ツ菜ツ無菜ツ也ツ」・天・饅・易「无齋」《料理が少ないこと》

Busó (無双) 落・文・易・運 《匹敵するものがないこと》

Buji (無事) 落・文・黒・饅・易・運・温 《平和、静穩》

Buxa (無射) 文・運 《注》正しくはフエキ。《日本の(陰曆)九月》

Buxó (無性) 落・易・運 《怠惰、投げやりなこと》

Buxózzura (無性面)

Buxei, i, Buminjin (無勢) 易・運 《少ない軍勢》

否定辞「無」を冠する漢語の首と意味

Burō (無道) 落・文・黒「無道理」・天・饅・易・運・温 《非理、不正、邪惡》
Bunin (無人) 易 《人が少ないこと》

Bunen (無念) 《念を入れぬこと》

Bunemo yubi (無名の指) 《業師指》

Buricou (無力) 落・文・饅・易・運・温 《貧困で財力に乏しいこと》

Buricujin (無力人)

Burei (無礼) 落・文・饅・易 《礼儀に欠けること、躰が悪いか足りないこと》

(口) Buannai (無案内) 落 《ある物事に慣れていないで、出処進退のわからない人》

Buyexacu (無会釈) 《辞儀や挨拶を欠くこと》

Buyenrio (無遠慮) 落 《将来に対する用意があまりなされないこと》

Bucōō (無孝行) 落 《父母、あるいは、主人や師に対して従順でないこと》

Bucannin (無堪忍) 《忍耐強くないこと》

Bucacngo (無覚悟) 落・文・易 《不用意、または、準備が足りないこと》

Budiguen (無機嫌) 落 《悪い顔つきをしていること》

Budiyōna (無器用な) 落・文・易・運・温 《粗野で、洗練されていないで、物事に巧みでない》

Bugirōna (無器量な) 落 《姿の悪い人》

Bugiriocu (無気力) 落 《生まれつき気弱なこと》

Bugenhō (無憲法) 《不正》

Bugenhōxa (無憲法者)

- Busaicacuna (無才覚な) 落 《物事に関して才智や注意が足りないこと》
- Busaicu (無細工) (注) 「邦訳日葡」では「不細工」を宛てる。《手が不器用である》
- Busodó (無相応) 《適當でない(もの)」、または、適合しない(もの)》
- Busata (無沙汰) 落・文・鰻・易 《挨拶、辞儀を欠くこと、または訪問しないこと》
- Buxian (無思索) 落・文 《思慮分別のないこと、あるいは、思慮のないこと》
- Buxxin (無執心) 《物事におまり心を傾けず、または、あまり愛着をもたないこと》
- Buxubi (無首尾) 落 《自分の言ったこととか、約束したことかを果さないこと》
- Buxozon (無所存) 落・天・鰻・易 《思慮分別が足りない、軽率》
- Buxotai (無所帯) 《締りなく浪費して、家事の切りまわしが下手で、だらしないこと》
- Buxirio (無思慮) 落 《思慮分別がなく、軽率なこと》
- Buxingóna (無信仰な) 《救霊のことについて不信心で、冷淡な(人)、信仰し難い(もの)》
- Buxinjín (無信心) 落 《救霊のことについて不信心な、または、冷淡なこと》
- Butaixet (無大切) 《愛情のないこと》
- Buchóxi (無調子) 《歌を歌ったり、楽器を奏したりするのに、調子外れであること》
- Buchófo (無調法) 落・文 《不器用さ、物事を調整したり、用意したりするのが不手なこと》
- Buchóren (無調練) 《経験の乏しいこと、または、修練の乏しいこと》
- Buninjia (無人数) 落・易 《人が少ないこと》
- Bufócó (無奉公) 落・文 《奉公しないこと、または奉公を怠けること》
- Bufocónin (無奉公人)

否定辞「無」を冠する漢語の音と意味

Buyōjin (無用心) 《監視と警戒をしないこと》

以上が「日葡辞書」所載の、「無」を冠する漢語である。これをまとめると、

〔無^ム〕類 (イ) 69語 (ロ) 16語 合計85語

〔無^ム〕類 (イ) 18語 (ロ) 30語 合計48語

となる。

形態上から見るに、〔無^ム〕類は(イ)型が圧倒的に多数を占めるが、〔無^ム〕類では逆にその多くが(ロ)型である。これは、〔無^ム〕類の語の多くは〔無^ム〕類の語に比して新しく生まれた語であることを示すものである。

意義の面から〔無^ム〕類と〔無^ム〕類とを比較すると、両者には、顕著な相違が認められる。すなわち、〔無^ム〕類に属する語は、その殆んどがマイナスの評価を与える語であるということである。〔無^ム〕類の語について意義による分類を試みると、次の如くなる(以下、例は漢字表記で示す)。

I マイナスの評価を表わす語

(a) 人の性質・態度(人倫に関するもの)

i 思慮のなさ……………無遠慮 無覚悟 無才覚 無思案 無所存 無思慮

ii 不熱心・不注意……………無念 無気力 無執心 無用心

iii 未熟・無器用……………無功 無案内 無器用 無細工 無首尾 無調子 無調法 無調練

iv 怠惰……………無性 無所帯 無奉公

v 粗暴・短気……………無道 無堪忍 無憲法

vi 礼儀しらず……………無音 無骨 無菜 無礼 無会釈 無沙汰

vii 不敬・不信心……………無孝行 無大切 無信仰 無信心

viii ぶざま・不気嫌・無興・無機嫌 無器量

(b) 貧困・劣勢

無力 無人 無勢 無人数

(c) 事柄のなりゆき

無相応

II その他

無為 無塩 無事 無射 無隻 無名(の指)

右の分類は必ずしも充分なものとは言えまいが、「無」類の語48語中、41語までがマイナスの評価を表わす語という大勢は動かないであろう。殊に「無」の下接語が二字の漢字から成る語には例外がない。

一方、「無」類ではマイナスの評価を表わす語は少数で、85語中24語に過ぎない。それを「無」類に準じて分類すれば、次の如くなる。

(a) i 無学 無才 無智 無筆 無能 無文 無分別 無文字

ii 無我 無性

iii 無功 無分曉

v 無体 無法 無理

vii 無道心 無仏世界

viii 無味

(b) 無位 無官

(c) 無益 無足 無徳 無功德

否定辞「無」を冠する漢語の音と意味

両者を比較して、「無」類の語とマイナスの評価との結びつきの強さは明らかである。しかも「無」類のそれは、その殆どが(a)人の性質・態度という人倫に関するマイナスの評価を与える語なのである。

以上の如く、「無」類の語と「無」類の語とは語彙的な意味の差の存することが知られるのであるが、これを呉音読語と漢音読語との対立と見ることはではないのである。「無」類の語であっても、例えば無功・無性・無人などのように、必ずしも漢音読語ではないのである。したがって「無」類の語と「無」類の語との語彙的な意味の対立は、畢竟、接辞の「無」と「無」の音の対立として把握されるのである。しかして、「無」と、人倫に関するマイナスの評価という表現性の結びつきは、語頭濁音としての「無」の表現価値が契機になっていると考えるべきであろう。⁽¹⁰⁾

結

室町時代に於いて、「無」を上接語とする漢語と「無」を上接語とする漢語とに語彙的な意味の差が認められるという共同論的事実と、ムライがブレイへと変化した事実とを直接的に結びつけることはできない。けれども、この変化の起きた中世という時代は、貴族支配が終り、武家支配がこれにとって代った社会構造の激変の時代であった。新しい封建制の確立をめぐっていた時代に強く求められたのは身分序列への配慮である。最古の武家家訓書「北条重時家訓」は、支配層の思想を具体的に伝えているが、そこで最も強調されているのは対人関係への留意である。「無礼ハ是さいなんの起り」(「今川大双紙」『群書類従』第四百十二)ということばも見られるように、中世は殊に対人関係への強い配慮が求められ、自然、敬語の著しく発達した時代であった。

ムライからブレイへの変化の背景には、漢語の漢音読語増加の一般的趨勢があったとしても、新形ブレイは、語頭濁音語としての表現性ゆえに、中世という時代において、名実ともにふさわしい語であったと考えるのである。

注

- (1) 山内洋一郎編『古本説話集総索引』(昭44・4)本文篇に依る。
- (2) 『古典文学大系』所載の「説話目録」に依る。
- (3) 箕泰彦『中世武家家訓の研究』では、重時作の立場から康元元(一二五六)年から弘長元(一二六一)年の成立と説かれている。石井進氏は、これを重時作とするきめ手は乏しいけれども、鎌倉期の武家家訓たることはまず動くまいされる(『中世政治社会思想』日本思想大系21 解題)。引例は『中世武家家訓の研究』所載本文に依る。
- (4) 三保サト子・三保忠夫「中世文書における語彙研究上の一問題——「非道」と「無道」——」(『福井大学『国語国文学』21号 昭54・2)
- (5) 柏谷嘉弘「源氏物語に於ける漢語」(『国語と国文学』昭32・11) 同「枕草子の漢語」(『国語と国文学』昭40・11) 同「更級日記の漢語」(『山口大学文学会誌』17巻1号 昭41・8)
- (6) 柏谷嘉弘「保元物語の漢語」(『大阪大学医療技術短大部研究紀要』10 昭43)
- (7) 沼本克明「変体漢文訓読に於ける字音語の性格」(『信州大学人文学部人文科学論集』第7号 昭48・2)
- (8) 「日葡辞書」に「*mu*」とあっても、それが「無」の漢音ではなく、「不」の音の濁音化したものが含まれている可能性もあるが、他の字書類での漢字表記が参照できない語の場合も、本稿ではすべて「無」の音を写したものとして取扱う。
- (9) なお、IIの語のうち、「無為」は仏教語の「無為」との同音衝突を回避した結果であり、「無塩」は同じく仏教語の「無縁」との連想を避けるという意識が働いたという事情も考えられよう。
- (10) 語頭濁音語の表現価値については、亀井孝「かなはなせ濁音専用の字体をもたなかったか——をめぐってかたる」(『人文科学研究』(一橋大学)昭45・3)に示唆を受けた。また、現代語の接辞「不」「無」について考察された須山名保子氏は、接辞「お」には、容貌、姿かたち、態度、動作、作法等がはっきり出る行為などで、みっともなく嫌な感じがする語の場合には、それは、「不」を強調し濁音化することがあり得たのではないかと説かれている(『接辞「不」「無」をめぐって』学習院大学『国語国文学会誌』17昭49)。
- (11) 「捷解新語」は否定辞「無」の音を考える上で注目すべき資料である。原刻本では、むいん(無音)、むじ(無事)、むだう(無道)、むてうほう(無調法)、むしつくと、中世の字書類と異なる語形が見られるのである。これが「改修捷解新語」では、むじ(無事)、ふてうほう(無調法)、ぶしつくとなっている。また「かたこと」には、

否定辞「無」を冠する漢語の音と意味

無骨を・むこつ

とある。これらの語形のゆれについては今後の課題としたい。

(追記)

本稿は、鎌倉時代語研究会第四回研究発表会(昭54・8・12)での口頭発表を纏めたものである。稿を成すにあたって、小林芳規先生のご指導を賜った。記して深謝し申し上げる。